



加吉だより

加古小学校通信
令和4年10月号
No.21 (294号)

脳内汚染

校長 吉田 博明

暴力のウイルス

論説顧問 三上喜美男

狙撃兵は高性能の銃で敵を狙い撃ちする兵士だ。第2次大戦中、旧ソ連では多くの女性が訓練を受けて戦地に立った。今年の本屋大賞に選ばれた「同志少女よ、敵を撃て」（逢坂冬馬著、早川書房）は、狙撃兵としてドイツ軍との戦いに身を投じた少女の物語である。村を焼かれ母親を殺された主人公セラフイマは銃を取る。過酷な訓練に耐えて前線を目指す。何のために人を撃つのか」と絶えず自問自答する。

「肉親や同胞の復讐」子どもたちの犠牲を防ぐため」さまざまな思いが去来し、何が本当か自分でも分からなくなる。ある日、上官の命令にセラフイマは動揺する。農家が供出した肉牛を撃つ、との指令だ。「敵ならまだしも、何も知らず穏やかにしている牛まで…」葛藤しつつも、命令に従って引き金を引くしかない。それは

日々小論

心の片隅に残るいつくしみの感情を押し殺す過程だった。人は人を殺すのをためらう。兵士でもそうである。先の大戦中、米兵のうち敵に向かって発砲したのは15〜20%にとどまったという報告がある。

だから軍隊という組織は心を取り去る知恵を絞ってきた。何も考えず反射的に射撃する訓練を重ね、敵を蔑視するよう教え込む。モニター越しのミサイル攻撃などは、痛みを伴わないゲーム感覚に近いのではないか。

それは暴力というウイルスを解き放つ行為であると米国の研究者トウ・グロスマン氏は指摘する。「戦争における『人殺し』の心理学」ちくま学芸文庫。ロシアのウクライナ侵攻が長期化し泥沼化するほど、ウイルスは勢いを増すだろう。小型核兵器使用の発言すら飛び交い始めた。平和といふもののワクテンはいっつ戻るか。

<脳の中で起こっていること>

10月5日付の神戸新聞の記事です。これを読んで、他人ごとではないと改めて思いました。元々、人間には「殺人」をためらう心の機能が備わっているそうです。記事にあるように、第2次世界大戦の時、敵に向かって発砲できた兵士は約20%でした。昔はアメリカでの狙撃訓練に使われていたのは丸形の標的でした。もっと発砲できるように考えられたのが、人型の標的。それだけで発砲率は格段に高くなったそうです。けれど、やはり人間です。敵を撃ったことで、PTSD（心的外傷後ストレス障害）になる人が多かったそうです。そこで考えられたのは何だと思いませんか？そう、実際に人を撃ち、血が噴き出る現実と同じような体験ができるゲーム機での訓練だそうです。（「脳内汚染」/岡田尊司著）

みなさんが楽しんで遊んでいるゲーム。中には戦いで、現実と同じようなリアルな画面の物もあるでしょう。みなさんがやっているのは、実際に人殺しをしても何とも感じない心を作る訓練をしているのと同じなのです。楽しみながら、どんどん人間らしい心を壊しているのだということを忘れてはいけません。そして、ゲームは中毒性が強いので、やればやるほどやめられなくなります。自分の脳や心を守る方法を考えなくてはなりません。これは、みなさんだけではできません。お家の人に協力してもらい、よく話し合って遊び方を決めましょう。年齢制限のあるゲームは、それだけの意味があるのです。